



**世界最強の  
真祖竜に  
転生しました!**

～でも目指すのは  
自由気ままな暮らしです～

Hajime Nanba

**難波一**

Illust. 蓮禾

Sekaisaikyou no  
sinsoryuu ni tensei shimashita

CHARACTERS

## 登場人物 紹介

### ベルザリオン

魔王軍四天王の一人。  
目的のためなら  
手段を選ばない冷徹さを持つ。

### リュナ

アルドを「兄さん」と慕う  
黒ギャルスタイルの少女。  
その正体にはとある秘密が……

### フレキ

外見は巨大な犬だが、  
実際は伝説の魔獣である  
フェンリル族の王子。

### アルド

本作の主人公。  
異世界の最強種“真祖竜”へと転生し、  
人間の姿で  
自由気ままな日々を楽しむ。

### ブリジット

ハズレスキルを授かったせいで、  
辺境へ追放された貴族家の少女。  
追放先を楽園にしようと奮闘中。

## 第一章 転生したら真祖竜でした

ブラック企業勤めは、RPGで言えば常時【毒】【睡眠不足】【混乱】のデバフを食らいながら、毎ターン残業でHPを削られるクソゲーである。

そのクソゲーの主人公だった俺、橘隆也、二十八歳、独身、恋人なし。趣味は深夜にラーメンを食べることとそのまま寝落ちすること。

ある日の深夜。仕事帰りに会社の階段を踏み外した俺は、そのまま人生を途中退場した。死んだ瞬間の記憶は、正直かなり曖昧だ。足を滑らせ、背中に激痛が走って、ふっと意識が途切れた。次の瞬間にはもう——真っ暗な空間に、ぼつんと放り出されていた。

空気もない。音もない。上下の感覚すらない。ただ、自分の意識だけがそこにある。

……なんだここ。俺、生きてるのか？ それとも死んでるのか？

何も見えない暗闇の中で、意識だけがふわわりと浮かんでいるような感覚だった。体があるのかどうかすら怪しいのに、不思議と「自分がここにいる」という実感だけははっきりしている。

あまりにも王道の展開すぎて、一瞬、本気で思った。

——これ、転生フラグじゃない？

死んだあとに真っ白な空間で女神様が出てきて、「あなたは選ばれました」みたいなやつ。社畜時代、現実逃避の一環で読んだネット小説のテンプレ展開が、脳内で次々と再生される。

だが、待てど暮らせど誰の声も聞こえない。

女神も天使もいない。チュートリアル係すら不在。雑すぎる。

その代わり、自分の内側で何かがぐにやりと変わっていく感覚だけがあった。

……あれ？

俺の身体——ない？

いや、感覚はある。だから完全にはないわけじゃない。だが、それはもう、今までの人間の身体ではなかった。

皮膚の感触も、手足の重さも、全部が違う。もつと硬くて、もつと重い。冷たいようできて、奥には熱を孕んでいるような、不思議な感覚だった。

そして何より、自分の中心そのものが変質していくのが分かる。

魂の構造が、まるごと別のものへ書き換えられていくような感覚。

だが、不思議と恐怖はなかった。痛みも苦しさもない。むしろ逆だ。温泉にいるよりも心地よい。柔らかな液体に全身を包まれながら、どこまでも深く沈んでいくような安心感があった。

——ああ、これ。俺、人間じゃなくなっていくてるんだな。

そう理解した瞬間、意識がふつと光に包まれた。

次に気づいたとき、俺は柔らかくて温かい液体の中にいた。

狭い。暗い。でも、さつきまでの虚無のような空間と違って、不思議と安心する。ぐるん、と身体が回る。手足らしきものもある。まだうまく動かせないが、確かに身体が存在していた。

そして、周囲を包む硬い感触に気づく。

……あ、これ

俺、卵の中にいる？ 理由はないが、直感でそれが分かった。

俺はいつたい何に生まれ変わるんだ。

殻があるってことは、鳥類か爬虫類か。そのへんかな？

視界の端に、わずかに光が差し込んでいた。

どうやら殻のどこかに隙間があるらしい。

新しい人生——いや、新しい生物としてのスタート。

けれどその始まりは、俺が人間ではなくなっているという、どう考えてもツツコミ待ちな地点からだった。

パキッ——

乾いた小さな音がした。

その瞬間、暗かった世界に細い光の筋が走る。どうやら殻にヒビが入ったらしい。

それに気づいた途端、なぜか俺の中で強烈な衝動が湧き上がってきた。  
生まれなければならぬ。そんな、本能じみた感覚だった。

俺は迷う間もなく、殻に頭突きをかました！  
ガンッ！

いてえ！ なんだこの殻!? 鋼鉄か!?

だが、それでも何度か頭突きを繰り返すうちに、ついに殻が大きく砕けた。  
眩しい光が、一気に流れ込んでくる。

生まれたての目には少し刺激が強すぎたが、それでもなんとか目を開けて——思わず漏れたのが、  
「……うわ、空、広っ」

それが、この世界における俺の第一声だった。

——いや、待って。俺、喋れたの!?

生まれたてで普通に日本語が出るって、どんな高性能生物だよ。

だが、それ以上に問題だったのは、目の前の光景だ。

……でつつつつつか!!

俺を取り囲んでいたのは、信じられないほど巨大な竜たちだった。

スケール感が完全にバグっている。軽く俺の何十倍もあり、高さは六十メートルはありそうだった。

ほんのり蒼く光る銀の鱗。黒曜石のような翼。瞳の奥に星が浮かんでいるみたいなの、幻想的で、  
それでいて本能的な畏怖を掻き立てる存在感。

そんな神話の中にしかないような連中が、揃いも揃って生まれたての俺を覗き込んでいた。

《目覚めたか……アルドラクスよ》

声は耳から聞こえたわけじゃない。頭の中に直接響いた。念話、というやつだろう。

あなたの脳に直接話しかけています、を実際にやられると、ちよつとビビる。

その声の主は、俺の正面にいたひとときわ巨大な竜だった。おそらく、この竜が俺の親なのだろう。

威圧感が凄まじいのに、瞳の奥にはどこか穏やかな色があった。

《汝は真祖竜の血を継ぎし者……古の契約により生まれし、運命の器である》

ええ……なんか急に設定が重いな。

俺、会社の階段から落ちて死んだだけのサラリーマンなんだけど。前世の退場の仕方からして、  
運命値かなり低めだと思っただけ。そんな俺を運命の器にして本当に大丈夫？ もつとこう、メ  
ジャーリーガーとか、そういう強そうな魂を採用した方がよくない？

しかも、その言葉に反応した周囲の竜たちが、一斉に低く唸り始めた。

《ほう……》

《これは……》

《新たなる『調律』の兆しか》

こわいこわいこわい。なにその、ラスボス誕生イベントみたいな空気。  
なんの状況説明も受けていないんですけど。

「えつと……初めまして。アルドラクス……です、たぶん。新参者ではございますが、何卒よろしくお願いします」

とりあえず社会人仕草で乗り切ろうとした俺は、身体についた卵殻の欠片を払い、ぺこりと頭を下げた。

まさか人生二周目の最初の挨拶が、神話級ドラゴン集団への自己紹介になるとは思わなかった。

《ふむ……すでに言葉を話すか。我が子ながら興味深い》

《魂に刻まれた記憶によるものか？》

《あるいは魂そのものの特異性か……》

竜たち——たぶん今世の父とか母とか、そのへんの近親者たちなのだろう——は、フレッシュさのかけらもない挨拶を披露した生まれたるの俺について、あれこれ考察を始めた。

しまった。さすがに生まれた瞬間から流暢に喋るのは不自然だったか。竜だからワンチャンいけるかと思つたが、そんなことはなかったらしい。

もう少しこう、バブーとかハイーとかチャーンとか、そういう無難な反応に留めておくべきだったかもしれない。

だが、そんな戸惑いの中でも、俺は自分の体の内側に、とんでもない力が満ちているのを感じて

いた。

心臓の奥で燃え盛るような力の渦。息を吸うだけで、周囲の空間がわずかに震えるような感覚。

筋肉のひとつひとつにまで力が行き渡っていて、軽く跳ねるだけで空に飛び出せそうなほどの万能感。

……これが、真祖竜って種族の力……

強い。間違いなく、とんでもなく強い。しかも体調がいい。異常なくらいにいい。

どこも痛くない身体なんて、いったいいつ以来だろう。肩こりも腰痛も、眼精疲労も、慢性的な眠気もない。ブラック企業時代の俺からは考えられない。

こうして、俺は今、真祖竜として、新しい人生——いや、竜生をスタートさせたのだった。

◇ ◇ ◇

孵化して三日目。俺は今、竜族の拠点のひとつ、悠座の講堂と呼ばれる石造りの大空間にいた。

天井はやたらと高く、白銀の天蓋の隙間からは外の空が覗いている。壁面には神話めいた壁画がびつとりと刻まれていて、実に荘厳な建物だ。

……なのに、とにかく空気が寒い。いや、物理的な意味じゃない。場の空気が、である。

講堂の中央、円形の石台の上に寝そべっているのは、俺を含めてたった五体の幼竜たち。

そのうち俺以外の四体は、みんなぼけーっと空を見上げていた。無言。無反応。動く気配も、喋る気配もない。

ドラゴンというより、じっとしたまま動かない動物園のワニみたいだった。

……おーい、同級生ドラゴンズ。なんか喋ろうぜ……

話しかけるべきか迷っていると、突然、上空のアーチの向こうから、ドオンツと重い音が落ちてきた。

降りてきたのは、一匹の巨大な黒竜。

鱗は煤けてぼろぼろ、翼は片方がだらりと垂れ下がり、片目は閉じたまま。びくりとも動かない。

呼吸も浅く、どう見ても現役を退いた老ドラゴンだ。

ゲームだったら、戦闘には参加せず、主人公たちに意味深な助言だけ残して去っていくタイプだ。

《……あゝ……めんどくさい……》

降り立つなり、開口一番それか。わざわざ念話でそれ言う必要がある？

《えー……その新顔どもよ。今日から一応、竜族としての基本くらいは教えといてやる。まあ、

気が向いたら聞け》

完全に寝起きの声だった。全くやる気が感じられない。

老竜は片手ならぬ片翼で頭をぼりぼりと掻き、深々と息を吸い込むと、いかにも面倒そうな調子

で語り始めた。

《まず、竜たるもの、強き種にして……めんどくさがりであるべし》

おっとお……なにその出だし。

《以下、七大怠惰戒律を心に刻め》

一瞬、講堂の中を風が抜けた。すると俺以外の幼竜たちは目を細め、ゆっくりと首を垂れた。そして老竜は、巨大な石碑に書かれた戒律を厳かに読み上げる。

《第一戒。鍛えてはならぬ。肉体・魔力の鍛錬は未熟なる者の営みなり》

《第二戒。競つてはならぬ。他者と力を比べるは品性の欠如なり》

《第三戒。嫉んではならぬ。羨望は竜の誇りを穢す毒なり》

《第四戒。語つてはならぬ。武勇を語るは己が未熟の証なり》

《第五戒。関わつてはならぬ。下位種族との交わりは墮落を招く》

《第六戒。留まるべし。竜は天と地に座す存在なり》

《第七戒。夢見てはならぬ。未来を渴望するは竜の尊厳を損なうなり》

……ええ……

クソ駄目人間じゃん。いや、駄目竜か。

『働いたら負け』を地で行く種族。それが真祖竜らしい。

だが周囲の幼竜たちは完全に集中モードで、どうやら本気で講義を聞いているらしかった。講堂の中心に、老竜の声だけが響く。

《竜とは、元より完成されし存在。我らは頂たかねにありて、揺るがぬ『調律』を保つ者なり。変化は混乱。成長は不要。だからこそ我らは、常に静かであるべきである》

それを聞きながら、俺はじわじわと理解していた。

この世界の竜たちは、努力⇨未熟、成長⇨敗北、みたいな価値観で生きているらしい。つまり、最初から強いなら何もするな、つてことか……

生まれながらに圧倒的な力を持ちながら、それをさらに磨みがこうとする発想そのものが野暮やぼで、みつともなくて、何より面倒くさい——そういう理屈なのだろう。

《以上、七大戒律をもって、本日の初等教育は終了とする。では、私は寝る》

いや、おじいちゃん。早すぎるだろ。せめて質疑応答の時間くらい設けてよ。

だが、そんな俺の心の叫びも虚むなしく、老竜はふわりと浮かび上がると、そのまま上空の天蓋へ向かって去っていった。

他の幼竜たちも、やる気のかけらもない顔で、だらんと寝転び始める。

お前ら……なんかもう、ダメだな。

こうして俺の竜族としての初授業は、静かに、そして圧倒的な情報量の少なさだけを残して終了

した。

講堂には再び沈黙が戻り、周囲の幼竜たちはそれぞれ気に入った場所であらけ始める。

……何もしなくていい、か。

前世は毎日深夜まで働かされ、休みもろくになかった。

それに比べれば、鍛えなくていい、競わなくていい、ただそこにいるだけで肯定されるこの生き方も、案外ありなんじゃないかと思えた。

——もしかしたら、この転生は神様が俺にくれた休息の時間なのかもしれない。そんなことを思いながら、俺も同級生ドラゴンズにならない、その場にごろんと寝転んで目を閉じた。

◇ ◇ ◇

真祖竜に転生して、十年が経った。

怠惰たいたが美德？ 最高じゃないか！

——そう思っていた時期が、俺にもありました。

真祖竜の戒律は、徹底して動かないことを奨励しょうれいする。鍛えるな。競うな。夢を見るな。下位種族と関わるな。他人に話しかけるだけで品位が下がる、みたいな空気すらある。

最初はむしろ都合がよかった。前世はブラック企業勤めで、朝から深夜まで働かされ、感情も感

覚も残業代と一緒にすり減っていたからだ。

今は寝て、起きて、ボーッとして、空を眺めて、また寝るだけ。

それで周囲からは「さすが真祖の幼竜……かくあるべき」と褒められる。

最初は感動した——この世界、優しすぎない？ と。

でも、十年も続けばさすがに飽きる。

「……暇すぎて、死にそうだ」

真祖竜たちが住まう島の高原で、岩の上に寝そべったまま、俺はぼつりと呟いた。

空は澄み渡り、風も陽射しも心地いい。のんびりするには完璧だ。

要するに、平和すぎて退屈だった。

「いや、もうこれは逆に拷問だろ……静かなる拷問だ」

前世の方が良かった、とはさすがに言えない。ブラック企業で心身を削られた日々は、思い出すだけで身震いするレベルのトラウマだ。

だが、何もしない——いや、何もできない生活も、それはそれできつい。これはもうスローライフじゃない。ストップライフである。

他の竜たちも、寝ているか、ぼーつとしているかのどちらかで、話しかけても会話にならない。仕事も娯楽もない。ただそこに存在するだけ。それが真祖竜という生き物だった。

極端すぎるわ！ ちよんどのいい人生はないのか!?

しかもこの十年、俺は何ひとつしていないのに、身体だけは勝手に成長していった。身体に宿る魔力は濃くなり、ブレスだつて気軽に撃て、羽ばたけば雲を裂く。先日なんて、あくび交じりに軽く羽ばたいただけで、遠くの山肌がひとつ削れた。何もしてないのに山を吹き飛ばせるようになるって、逆にクソゲーでしょ……その一方で、精神の成長は——

「……完全に止まってる気がするな」

この先も百年、千年とこんな日々が続くのかと思うと、胃は痛まないけど、心がじわじわ削れていく。

俺………なんのために生まれ変わったんだろ………?

そんなある日。俺は、同じく幼竜の一体に話しかけてみることにした。

名はグルーシャ。俺と同時期に孵化した仲間で、艶のある背中の鱗が特徴だ。性格は……まあ、例にもれず、ひたすらテンションが低い。

岩陰でうつ伏せになり、ぐだーつと尻尾を揺らしていたグルーシャに、俺は声をかけた。

「なあ、グルーシャ。ちよつと聞きたいんだけど」

《……ん………何………》

声すら寝ている。念話まで半分寝言みたいな調子だった。

「七十大怠惰戒律 っつて、破ったらどうなるの?」

その瞬間、グルーシャの尻尾がぴくっと止まった。わずかにまぶたが開き、眠気が少しだけ引いていく気配がする。

だが、返ってきたのは意外な答えだった。

《……何も……起きない。そう聞いたことがある。ああ……あのときはアルドいなかったね》  
「え？」

《ただ、墮竜<sup>たりのりゅう</sup>、って呼ばれるようになるだけらしいよ……》

「墮竜って……それ、やばいんじゃないのか？」

俺の脳裏には、一瞬で物騒な想像が浮かんだ。掟<sup>おきて</sup>を破ったことで島を追放され、異端として他の竜たちから狙われる——みたいな展開だ。

《うくん……別に。皆、めんどいから怒らないし。そもそも関わらないし……》

「罰<sup>ばつ</sup>は？」

《ない。処罰も、監視も、忠告も、説教も、ないよ》

「——え、甘くない？」

《『七大怠惰戒律<sup>セブンスロウスコード</sup>』は、守るためのものじゃなくて、そうあってくれたらいいな、っていう方針……みたいな》

「えええええええ……」

思わず頭を抱えた。あの宗教めいた教義、まさかのただの願望だった。努力しても怒られず、止

められもしない。

というか、それもう戒律じゃなくない？

俺は生まれてこの方ずっと、禁じられた努力にびびって手を出さなかったのに。

つまり、やってもいいけど、誰も責任は取らないってことか……一番ずるいやつだ。

目の前のグルーシャは、またぐだーつと寝転び直し、のびをしていた。

《でも……そんな面倒なこと、やる奴いないよ……みんな怠<sup>だる</sup>いし》

「……」

何もしない。何も起こらない。誰も責<sup>せ</sup>めないし、誰も褒<sup>ほ</sup>めない。その自由の中に、選択肢だけがぼつんと置き去りにされている。

俺は、空を見上げた。青すぎる空に、ほんの少しだけ孤独<sup>とどく</sup>を感じる。

——何もしていないのに強くなる。でも、それで満たされるわけじゃない。

その瞬間、俺の中で、何か確実に切り替わった。

……だったら、俺がやる。誰もしないなら、俺が最初でいい。

このどうしようもなく怠惰な種族の中で、せめて俺だけでも——

「動いてみる」ってのも、悪くないかもしれない。

そんなふうに、俺は思った。

◇ ◇ ◇

真祖竜が住まう空の浮島——「悠天環」。

俺ことアルドラクスは、今日も散歩という名の暇つぶしに出ていた。

真祖竜は頂の存在というのも、あながち誇張じゃないらしい。何もなくても身体は勝手に強くなるし、食事を取らずとも空気中の魔力を取り込んで半永久的に活動できる。

悠座の講堂の石碑によれば、俺たち真祖竜は、すべての世界の魂を調律する存在らしい。

ちよつと意味が分からない。魂って楽器みたいに調律するものなの？

神様が能力調整を盛大に間違えた種族——と言われた方が、むしろしつくりくる。

そんなことを考えつつ、俺は悠天環の大地をのしのし歩いていた。

「いや、もう……どこまで行っても山と雲と岩しかないんだけど」

広い。とにかく広い。見晴らしが良すぎて、景色がどこまでも同じに見える。

歩いても飛んでも誰にも会わず、声をかけても返事はない。探索ゲームの初期マップなら、単調すぎると酷評されるレベルだ。クソマップにも程がある。

そんな中、ふと足元に古い石碑を見つけた。

『この先、禁足の地——「星降りの宝庫」。立ち入りを禁ず』

古めかしい竜語だが、転生してから身についた力のおかげで自然に読める。念話みたいに、意味がそのまま頭へ流れ込んでくるのだ。

「……宝庫？」

石碑の向こうでは、巨大な岩山がぼつかりと口を開けていた。

おお……なんか、すぐくそれっぽい。

竜族の価値観では、こういう場所に近づくこと自体がアウトらしい。『夢見てはならぬ』が戒律に入っているくらいだ。探検や冒険なんて、不純そのものなのだろう。

だが——

「……誰もいないし、扉も封印も何ももないな」

辺りを見回しても、警備も結界も監視の気配もない。

「禁足地って書いてあるだけで、なんのセキュリティもないんじゃないの、これ」

口にしたみたが、雷も落ちてこないし、警備の竜が飛んでくる気配もない。

……まあ、ちよつと覗くだけなら。うん。

そんな言い訳を繰り返しながら、俺は暗い岩の中へ一歩踏み出した。

中は、想像以上に広かった。

生まれて早十年。正確に測ったわけではないが、俺の身体も今では全長四、五メートルほどの幼竜にまで成長している。

以前、湖面に映った自分の姿を見たことがある。

流線型の体躯に、白銀のふさふさした毛並み。翼の先の鉤爪は、この世に斬れないものなどないと言わんばかりに鋭かった。

白く神々しい幼竜、という感じで、我ながらなかなか見栄えはいい。伝説っぽさもある。そんな俺が余裕で通れるほど、この通路は広かった。

大人の真祖竜たちが使う宝庫なのだから当然かもしれないが、それでも感動するほど巨大な地下通路だ。久しぶりに、少しだけ胸が高鳴る。

岩肌の通路を抜けると、地下とは思えないほど広い空間が広がっていた。天井には無数の発光鉱石が埋め込まれ、星空みたいにきらめいている。

そして——そこにあっただのは、財宝だった。

金銀財宝。宝剣や王冠。巨大な結晶の山。まるで伝説そのままの宝物庫だ。

これ、全部竜たちが集めたのか……？

けれど、俺の足が向かったのは宝の山じゃない。もっと地味な一角だった。

片隅に押し込まれた、大量の本。

魔法、歴史、世界の仕組み——人間たちが積み上げてきた知識の本だ。

「……すごい」

一冊を手にとってページを開いた瞬間、俺は夢中になった。

そこには、この世界の知識が詰まっていた。

誰でも学んで扱える「魔法」と、特定の個体だけが持つ「スキル」。

魔法は知識と魔力で組み上げる体系化された技術で、スキルは魂や種に刻まれた固有の力。

そして真祖竜は、その膨大な魔力と学習能力によって、本来なら高度な魔法すら短時間で扱える可能性があること。

文字を追うたび、世界が広がっていく。

「……面白い。すごいな、これ」

読み進めるうちに、俺は気づいた。

この知識は童社会では完全に封じられている。というより、誰も見向きすらしていない。

人間たちが積み上げてきた知恵と努力の結晶が、ここに押し込まれたまま放置されているのだ。もったいなさすぎる……

そして——ページの端に、ふと目を引く単語があった。

『変身魔法』——姿を変える術。自身の魔力を組み替えることで、異なる形態を取ることが可能』

挿絵には、人間の姿へ変化した魔物らしき影が描かれている。

「……あれ？」

その瞬間、俺の中にひとつの想像が芽生えた。

もし、これが使えたら。もし、人間の姿になって、人間の世界へ行けたら。

この静かで退屈な箱庭を抜けて。  
誰も動かない竜の世界から、動き続ける人の世界へ。  
……行ってみたい。ここじゃない、どこかへ。  
初めて、心の底からそう思った。

◇ ◇ ◇

時間の感覚は、どこかへ消えていた。

俺は書物の山に埋もれながら、夢中でページをめくっていた。何冊読んだのかは、もう分らない。

「……すごいな、この世界の人間。こんなものを、全部……」

情報の海に、俺の意識は沈んでいた。

前世では、机に向かっても十分と集中できなかった俺が、だ。でも今は違う。目に映るすべてが、脳に直接語りかけてくるような感覚だった。

もつと知りたい。もつと学びたい。心の奥が、そう叫んでいた。

「……学ぶって、面白いんだな……」

真祖竜の身体は、脳の作りも人間とは違うのだろう。いくら知識を詰め込んでも疲れないから、

なおさら学ぶことが楽しいのかもしれない。

竜社会では、知識など無意味なものとされている。なぜなら、最初から完成されているから。でも、俺は思う。完成されていることが、そんなに偉いのか？

努力して、試行錯誤して、失敗して。それでも前へ進もうとして、積み上げてきたものこそが、この知識なんじゃないのか。

「……何もしないで偉そうにしているより、ずっと……」

手元の一冊を閉じる。古びた革の装丁が、やけに重く感じられた。

そのときだった。棚の奥の本が目に残った。

それは、表紙に『全魔典』と書かれた、古めかしい魔導書だった。

「……………」

俺はそつとその本を手に取り、ページを開いた。

術式の図解、発動条件、魔力の流れ、複雑な構造式。魔法に関するあらゆる知識が詰め込まれているようだった。

難解なはずなのに、不思議と読める。

「これ……いけるかもしれないな」

人間に変わるための魔法。この本の知識を使えば、習得できるかもしれない。

それは決して、弱くなるためではない。世界を知るための鍵だ。

もしこの魔法が使えるなら——俺はこの島を出て、外の世界へ足を踏み出すことができる。

静寂せいじやくに包まれた宝物庫の中で、俺の心だけがざわめいていた。

翌朝。宝物庫の出口で、俺は大きく伸びをした。

久しぶりに、夜を徹ととして何かをしていた気がする。肩こりのない身体ていしって素晴らしいな、としみじみ思う。人間時代なら完全に首が終わっていたやつだ。

「さて、と……バシてないよな、たぶん」

昨日と同じように洞窟を抜け、石碑の前を通り過ぎる。他の竜たちは、例によって誰もいない。

みんな寝ているか、雲を眺めているか、ぼんやりしているか、呼吸しているか。いつも通りの竜時間である。

……ただ、一体だけ、いつもと違う姿があった。

「……グルーシャ？」

例の艶鱗えんりんの同級生が、岩陰に半身をもたせかけ、うつ伏せのままぼんやり空を見上げていた。

気づいていないのかと思って、そのまま通り過ぎようとした瞬間——

《……昨日、どこ行つてたの》

その声が、念話で頭の中に響いた。俺は足を止めた。

「……散歩してただけだよ」

《ふーん……ずいぶん長い散歩だったね》

「たまたま……寄り道しただけ」

しれっと返す。たぶん、バレバレだ。だが、咎とがめられる気配はない。

《星降りの宝庫……でしょ》

……ああ、これは完全に見られていたやつだ。でも、不思議と焦あせりはなかった。

「なんで止めなかった？」

少しの沈黙のあと、返ってきたのは、

《……めんどくさいし》

という、あまりにも童らしい答えだった。思わず吹き出しそうになる。

「……それが理由かよ」

《うん。あと……興味があるなら、見に行くのもいいんじゃないかなって、思った》

グルーシャが、ようやくこちらを見た。いつもの眠たげな瞳。けれど、その奥にほんの一瞬だけ、確かな『芯しん』のようなものが灯ともった気がした。

《……ねえ、アルドラクス。何かやるの？》

その問いは、驚くほど率直だった。

俺は少し考えてから、ゆっくりと頷く。

「……ああ。俺、たぶん——世界に出ると思う」

グルーシャは、その言葉を受け止め、瞬まばたきひとつせずと言った。

《そっか。がんばってね》

なんの感情もこもっていないように聞こえるその声が、なぜだかやけに暖かった。どこまでも広がる空は、ただ眺めるためにあるんじゃない。

飛び出していくためにあるんだと、初めて思えた。

こうして俺は決めた。

真祖竜としてただ眠り続けるのではなく、自分の足で世界を見に行くと。

最強種だとか、悠久だとか、そんなことはひとまず後回しでいい。

この退屈な楽園を飛び出して——面白いものを、自分の目で見つけに行こう。

## 第二章 変身、そして旅立ち

俺が星降りの宝庫に入り浸るようになってから、気づけば数十年が過ぎていた……たぶん。

日数を数える手段が、自分の感覚しかないからだ。ここには時計もカレンダーもない。ただ静寂と本と、永遠みたいな時間があるだけだった。

気づけば、読んだ本は一万冊を超えていた。知識が増えるたびに、世界の解像度が上がっていくようだった。

いつもの場所で、俺は今日も魔導書、全魔典（インマゼク）のページをめくっていた。

この本は、読み進むたびに新しいページが現れる。いくら読んでも終わりがない。実に不思議だ。

「ふむ……変身魔法の本質は、魔力の配列（はいれい）と質量制御（しりょうせいぎよ）か……」

理屈自体は、そこまで難しくなかった。問題は、その土台になるイメージの方だ。

つまり、変身後の姿は、自分がどれだけ明確に思い描けるかで決まるらしい。

「要するに……理想の自分像を思い描いて、そこに魔力を当てはめればいいってことだよな」

理屈は分かる。だが、その理想像があまりにも曖昧だった。

「俺、そもそも前世の自分の顔って、ちゃんと思いつけるか……？」

記憶はある。でも、もうぼんやりしている。浮かぶのは、会社のIDカードに写っていた疲れた自分くらいだ。

「……だめだ。理想像を思い描こうとしているのに、週末にコンビニへ行くときのジャージ姿しか出てこない」

さすがに夢がなさすぎる。せつかく別の姿になれるなら、少しくらい見栄えのいい自分を想像したかった。

「とりあえず、全力で整ってる俺を妄想してみるか……」

どうせ人に化けるなら、少しくらい格好よくなってみたいと思うのが人情というものだろう。

元の顔立ちをベースに、鼻筋は通っていて、目元はすっきり、髪（かみ）はさらり。そこに少しかだけ知性

と冷静さを足す。ネトゲのキャラクリみたいだね。  
うん。これだ。

この世界でどんな顔が美形とされるのかは分からない。そもそも転生してから人間に会ったこと  
すらない。

それでも、せっかくなら自分なりにこうなれたらいいと思える姿にしたかった。

イメージを膨らませ、魔力を循環させる。

身体の内側で、熱を帯びた魔力がゆっくりとうねり始めた。

「……変身魔法、発動……！」

全身の鱗が、ふわりと光の粒になってほけていく。

骨格が変わる。筋肉が組み替わる。視点の高さが変わっていく。

そして――

その日、俺は初めて人間の姿になった。

「……おおおお……！ できた!? 本当にできたのか!？」

反射的に近くの水鏡へ駆け寄る。水面に映っていたのは、紛れもなく人間の俺だった。

「……………え、誰？」

年の頃は十五、六。綺麗すぎるくらい中性的だ。

「いや、それはいいんだけど……なんか若くない？」

どう見ても高校生くらいにしか見えない。竜としての成長段階が、人間形態にも反映されたのだ  
ろうか。

「しかも、なんか……色白すぎるな。あと髪、やたらさらさらだな……」

自分で言うのもなんだが、少し近寄りたいくらい綺麗な美少年になってしまった気がする。

華奢ではあるが、体つき自体のバランスは悪くない。やや可愛い系に寄りすぎているが、全体

としてはかなり整っていた。

「総評。かなりイケてる。でも理想より、ちょっと中性的すぎる」

悪くはない。全然、悪くはないのだが――

「俺の理想の自分って、こんな感じだったかなあ……？」

どうやらこの変身魔法、思い描いた理想と、無意識の願望や現在の肉体状態なんかが混ざった形  
で出力されるらしい。でも――

「……すごいな、これ」

水面の中の自分が、瞬きをした。俺も、つられるように瞬きを返す。

「本当に……なれたんだ」

人間に。前世以来の、人間の姿に。この姿なら、人間の世界へ行ける。

「よし……次は、服だな!」

さすがに全裸で旅立つわけにはいかない。

新たな課題を前に、俺は少し浮き立った気分のまま、宝物庫の衣装棚へ向かった。

「……ここに人間の服まであるってことは、昔の竜は変身して外に出てたってことだよな……？」  
竜社会では「人間に関わるな」が鉄の掟みたいに語られていた。もつとも、実際には罰則も何もないのだが。

その割に、この宝庫には人間由来と思しき品があまりにも多い。

つまり昔は、少なくとも今ほど閉じた種族ではなかったのかもしれない。  
これは過去の名残なのか。それとも、捨て去られた可能性の残骸なのか。

「……いや、感傷かんじょうに浸ひたってる場合じゃない。まずは服だ」

そう思っただけ振り向いた瞬間、山積みになされた衣装の一角が、ずざつと崩れかけた。

「うおっ!? つとと……!! ……あ、これ」

咄嗟とつさに受け止めたのは、黒いマントと旅装束一式だった。

白を基調にした上衣に、革のベルトや留め具が組み合わされていて、軽装なのにいかにも冒険者らしい。布地は動きやすそうに見えるのに、縫い込みや金具の配置には妙に隙がなく、実用性もしっかりとっていいそうだ。

おそらく魔道具なのだろう。だが、そんな理屈抜きに一目で気に入った。

かっこつけすぎず、それでいてちゃんと異世界の旅人らしい。このくらいの装いの方が、今の俺にはしっくりくる。

「……これ、着てみるか」

宝庫の隅にあった古い姿見の前に立つ。

白い上衣を身につけ、肩から黒いマントを羽織る。近くにあった黒革のブーツを履き、腰には太めのベルトを巻き、小さなポーチをいくつか提げた。

「……」

鏡に映った自分を見て、思わず目を奪われる。

「……なんか、美少年主人公感あるな……」

自画自賛じゃない。客観的に見て、だ。

どこか育ちが良さそうに見えるのが少し癪しやくだが、中身は元社畜のおっさんである。  
それでも今は、背筋を伸ばせば自然と、旅に出る少年の顔になれる気がした。

目の奥にあるのは、まだ見ぬ世界への好奇心。このマントの背には、これから吹く旅の風がよく似合いそうだった。

「よし……これで行こう」

服を選んだだけのはずなのに、不思議と胸の奥が熱い。

俺はもう、ただ眺めているだけの存在じゃない。この足で、動く側になるんだ。  
鏡の中の銀髪の少年が、静かにこちらを見返していた。

「……じゃあ、行くか」



俺は鏡に背を向け、マントの裾を払って歩き出す。

星降りの宝庫の扉が、静かに開いた。

その音は、未来へ続く扉の音にも聞こえた。

夜明け前の空は薄く紫がかり、ひととき白い月が、まだ沈みきらずに残っている。

——旅立ちには、悪くない時間だ。

俺は宝庫で見つけた容量拡張ようりょうかくちようの袋——いわゆるマジックバッグに荷物を詰め込み、竜の姿のまま悠天環の縁に立った。

この浮島の端から飛び立てば、あとは空の果てまで自由だ。

何にも縛られず、どこへでも行ける。

けれど、その前にひとつだけ、済ませておきたいことがあった。

「……グルーシャ」

背後の気配に振り返ると、いつもの眠たげな目をした幼竜が、ゆっくりとこちらへ歩いてきていた。

身体の線は俺とよく似ている。白銀の鱗あめが淡い朝の光を受けて、かすかに輝いていた。

《……旅、行くんだね》

「うん。そろそろ限界だ。ここに、俺の居場所はない」

俺がそう言うと、グルーシャはほんのわずかに尻尾を揺らした。たぶん、それが彼女なりの感情

の動きなのだと思う。

《……星降りの宝庫の本、まだ全部読んでないんじゃない？》

「全部読むには、たぶんあと百年はかかるよ。続きは、また帰ってきたときにでも読むさ」  
冗談めかして言ったつもりだった。でも、グルーシヤは何も返さなかった。

俺も、少しだけ言葉に詰まる。

この数十年、彼女は唯一まともに会話が成立する相手だった。無関心そうでいて、俺の変化を誰より早く察していた。

だからこそ――

「ありがとうな、グルーシヤ。お前がいたから、俺は……」

そこで言葉が止まった。

感謝とか、友情とか、そういう分かりやすい言葉では上手く言い表せない。

でも確かに、彼女がいてくれたから、俺は孤独に飲まれずにすんだのだと思う。

そんな俺を見て、グルーシヤは眠たげな目を細めた。

《……ばいばい、アルド。気をつけてね》

それだけ言って、彼女は背を向けた。去っていくその姿を、俺はしばらく見送っていた。

すると、最後に彼女がふと振り返って、ぽつりと言った。

《……アルドなら、どこへ行っても大丈夫でしょ》

その言葉は、不思議なくらいまっすぐ胸に響いた。

誰かに信じてもらえるって、こんなにも嬉しいものなんだな。

「……ああ。行ってくる」

俺は小さく頷いて、空を見上げた。

そして翼を広げる。

足に力を込め、俺は空へと駆け出した。

◇ ◇ ◇

――飛んだ。いや、飛んでしまった。

「うおおおおおおおおおっ!？」

空へ跳ね上がった瞬間、自分の身体がふわりと宙に浮いた感覚に、思わず叫ぶ。

いや、想像はしていた。していたけど。予想の三倍くらいおっかない!

「……う、うわぁ……高っ!? 高すぎるって!」

まるで自分が弾き飛ばされたみたいな勢いで、真祖竜の巨体が雲を突き抜け、一直線に空へ舞い上がっていく。空気の壁を突き破るような感覚。全身を押し返してくる風圧。

なのに、なぜか苦しくはない。むしろ、気持ちよかった。

「やばい……飛んでるだけで、ちょっと楽しいかもしれない……！」

などとテンションを上げていたのも束の間――

「おおおとつとつと!? 旋回せんかいつてどうやるの!？」

右へ曲がろうと意識したら、なぜか左へ傾いた。そのままぐるりと体が回転して、

「うわああああああ!! ぐるぐるするううう!!」

翼が大きすぎるのか、速度が出すぎているのか。旋回どころか、見事な錐採きりもみ状態である。

「何これ!? 危なっ!? いや、でも酔よわらない!? 竜だからか!? そんなことより、誰か飛び方の

説明書を！ 説明書をください！」

真祖竜の大人たち、誰も飛び方なんて教えてくれなかったからね！

宙を何度か回転したあたりで、ようやく少しずつコツが掴めてきた。バランスの取り方。翼の角

度。風を受け流す感覚。それらが理屈ではなく、身体感覚として染み込んでくる。

「……ふう……お、おつけ。ちよつと安定してきた。たぶん」

ようやく姿勢を立て直して、改めて周囲を見渡す。

目に飛び込んできたのは、どこまでも澄み切った青空と、いくつもの浮島、果てしなく広がる雲

の海だった。

「……すごい……これが、この世界の空か……」

風を掴む感覚が、翼の先に伝わってくる。自分の力で空を裂き、空を駆ける。

それは紛れもなく――

「……俺、今、めっちゃくちゃ主人公っぽくない？」

口に出した瞬間、自分で言っておいて少し笑ってしまった。でも、そう思ったのだから仕方ない。

地上からは見えない景色。竜でなければ味わえない空の広さ。今、自分の翼が世界の地図を描い

ているような気がした。

「どこへでも行けるんだな……」

視界の端には、遥はるかか下に広がる山脈。森。川。街らしき人工物まで、かすかに見える。

どこへ行こう。何を見よう。誰に会おう。そんな選択肢が、際限なく広がっていく。

「これが……始まりつてやつか……」

太陽が、真祖竜の白銀の鱗を眩しく照らしていた。その影が、雲の海に長く延びている。まるで

世界が、ここに俺がいることを刻みつけてくれているみたいだった。

まだ誰も知らない白銀の竜。まだ何者でもない存在。だけど、だからこそ――

「何にだって、なつてやるさ」

この広い空のどこかに、まだ見ぬ誰かがいる。俺の知らない世界がある。

――なら、行くしかないだろ。

「よし……真祖竜アルドラクス、いっちょ世界デビューといきますか！」

ふわりと翼を打ち、さらに高く飛ぶ。風が、ぐつと背中を押しした。

……なんか今、ほんとに主人公っぽいな……  
鼻の奥が少しだけつんとした。たぶん、風のせいだ。きつとそうだ。  
俺の旅が、今始まった。竜としてではなく、人として、この広い世界に居場所を見つけるために。  
——真祖竜アルドラクス、いざ出発！  
このあと地上で、いきなりとんでもなく騒がしい出会いが待っているなんて、このときの俺はま  
だ知らなかった——

### 第三章 ヒロインと魔竜

それは、ブリジットが十五歳の誕生日を迎えた日のことだった。

王都にあるノエリア家の屋敷——貴族街の奥に建つ、金と白の大理石で飾られた館には、祝福の鐘が高らかに響いていた。

純白のドレスをまとったブリジットは、胸の前でそっと両手を重ねる。

「ついに……」女神の祝福「か……！」

十五歳を迎えた人間には、女神の祝福によってスキルが授けられる。

魔法が学びによって身につける技術なら、スキルは天より与えられる才能だ。とりわけ貴族に

とっては、将来を大きく左右する重要な要素でもある。

「やっぱり剣術系がいいなあ……でも魔法系も懂れるし……！ どうしよ、楽しみすぎて震えてきた！」

その瞬間を、ブリジットはずっと心待ちにしていた。

彼女は努力家だった。剣も魔法も人一倍励んできたのは、父に褒められたい、母に認められたい、兄の力になりたい——ただその一心からだ。

だからこそ、その結果をすぐには受け止めきれなかった。

《授与スキル 【毒無効】》

祭壇の女神像がまばゆく輝き、天からその言葉が下された瞬間——場の空気が凍りついた。

「……毒、無効……？」

「……は？」

父グレゴールは黙り込み、母ミレーユはあからさまな失望をその顔ににじませる。

「……よりによって【毒無効】？ それで何を成すつもりなの？」

直接戦闘力にも家の名譽にも結びつかない、地味なスキル——それが、この場での評価だった。祝福の儀は、いつの間にか冷たい査定の場へと変わっていた。

やがて父が差し出したのは、一枚の文書だった。

『未開地フォルティア荒野、開拓指令書』

「……そんな……！」

「あの地を領地として確保できれば、お前にも再び居場所ができるだろう」

「……ひどいよ、そんなの」

かすれるような声にも、父は何も答えなかった。

それが——十五歳のブリジットが、初めて知った家族の冷たさだった。

帰りの馬車の中、彼女は膝を抱え、小さくうつむいていた。

「……あたし、負けないから」

涙をにじませながら、それでも唇を引き結ぶ。

「毒にだって負けない体なんだから。だったら、こんな仕打ちにも負けない」

——その日から、彼女の『本当の人生』が始まった。

誰かに与えられた道ではない。誰かに認められるためだけの道でもない。

自分で選んだ道を、自分の足で歩いていくための人生が。

そして今、彼女はその道の上に立っている。

吹きすさぶ風の中、誰にも頼らず、自分の手で未来を切り拓こうとしていた。

まだ一人の少女でありながら、その姿は静かに、けれど確かな強さを宿していた。



フォルティア荒野。

大陸中央部に広がる未開の地であり、強大な魔物が跋扈する危険地帯だ。周辺国家すら手を出さず、この世界の最強格とされる「魔王」でさえ近づかないと噂されている。

乾いた風が吹き抜ける荒野の一角に、ぽつんと一張りのテントがあった。

その前に立つ少女——ブリジット・ノエリアは、腰に手を当て、大きく息を吸い込む。

「——よしっ、今日も頑張ろっ！」

明るい声が青空へ弾けた。

金色のポニーテールがふわりと揺れ、泥にまみれた青い冒険装備の裾も気にせず、彼女はにかっ  
と笑う。

「……まさかスキルが【毒無効】ってだけで、こんな場所に送られるなんて思わなかったけど」

ぬるくなった水をひと口飲み、小さく息をつく。

それでも、彼女はすぐに顔を上げた。

「でも、ここを切り拓いて領地にできたら……きっと、すごく格好いいよね」

誰もいない荒野に向かって、ブリジットは笑う。

「あたしは、この場所を新ノエリア領にしてみせる」  
そう言つて、斧おのを握り直した。そのときだった。  
静まり返っていた森の奥から、異様な音が響いた。  
「(こ)こ……と地鳴りのような振動が足元を揺らし、空気が重く沈む。木々がざわめき、生き物たちの気配が一斉に消えた。」

次の瞬間――

『ガアアアアオオオオオッ！』

咆哮ほうこうが森を引き裂いた。

「……う、うそ……！！」

草地の先、木々をなぎ倒して現れたのは、黒銀の鱗に覆われた巨大な魔竜だった。

六本足の異形――「咆哮竜ザグリユナ」。

二十メートルを優に超える巨体。猛禽もうきんのような鋭い眼光と、岩すら砕きそうな牙きばを備えた、まさしく災厄さいやくそのもの。このフォルティア荒野の主だった。

「う……あ……」

腰が抜けそうになる。心臓が暴れ、手が震えた。

握った剣が、自分のものではないみたいに頼りない。

「ば、バケモンじゃないかよあれえ……！！」

「無理だ無理だ！ あんなのと戦ったら死ぬ！」

悲鳴を上げたのは、後ろに控えていた数人の部下たちだった。

「ブリジット様、すみません！ 俺たち、死ぬのはごめんです！」

「どうかお元気でええええ！」

そのまま彼らは、振り返りもせず一目散に逃げ出していく。

「――え？」

視線だけが、その背を追った。誰も戻らない。誰も手を差し伸べてくれない。

取り残されたブリジットは、森と大地の狭間はざまで、ザグリユナの正面に立たされていた。

「……………」

剣を両手で握り直し、震える腕に必死に力を込める。瞳には涙がにじんだ。

ここで死ぬ。逃げ道もない。助けもない。

それでも――

「――ここで死んだら、もう何者にもなれないじゃない……！！」

震える喉のどから、かすれた声を絞り出す。

「認めてもらいたい……お父様にも、お母様にも……あたし、ちゃんとやりたいのに……頑張ってるのに……！！」

ブリジットは剣を構えた。両足を踏みしめ、必死に前を向く。

顔は青ざめていた。けれど、その目だけは折れていなかった。

「だったら——ここで！ 倒れてる場合じゃないの！」

鼓動が激しく打ち鳴り、呼吸さえうまくできない。

それでも、彼女は逃げなかった——その瞬間。

「どしゃああああああんん！」

空から、何かが落ちてきた。

ザグリユナとブリジットの中間地点に激突し、地面が砕け、砂塵さじんが激しく舞い上がる。

「きゃっ!!」

ブリジットは思わず尻もちをついた。風圧に頬ほを打たれ、髪が大きく乱れる。

反射的にかばった腕をそっと下ろし、恐る恐る見上げた先——

クレーターの中心に、何かが深々と突き刺さっていた。

「……えっ……な、なに……?」

黒色のマント。乱れた銀の髪。どう見ても、人間の男の子だった。

ただし、その少年はクレーターのご真ん中に、下半身から深々と埋まっていた。

「……いてて……いや、痛くはないな。あれ? え、ここどこ?」

少年はずぼと体を引き抜くと、服についた土埃ちまを払いながら、きよろきよると辺りを見回した。頭に石ころを乗せたまま、ぼかんとした顔でブリジットと災厄の魔竜を見比べ、頭をぼりぼりと

かく。

「あ……すみません。お取り込み中でした?」

◇ ◇ ◇

腰まで地面に突き刺さっていた俺——アルドは、ようやく体を引き抜いた。

飛行中、そろそろ地面に降りようと思って、誰かを驚かせないよう空中で人間形態に変身してみただが——そのまま見事に落下し、地面に突き刺さる羽目になった。

「どうやら人の姿では飛べないらしい。残念だ。もつとこう、ヒーローみたいに空を駆けられるかと思っただけだ。」

足元には、綺麗な半球状のクレーターができていた。

「うーん、着地失敗したな……」

視界の端では、青ざめた少女が尻もちをついたまま、こちらを見上げています。

金髪のポニーテールに冒険者風の装備をまとった女の子だ。目が大きくて、泥で汚れていてもやたら可愛い。いや、本当に。

人間の女の子を見るのは、およそ半世紀ぶりだ。多少の補正はあるかもしれないが、それを差し引いても整いすぎている。

……久しぶりに見た人類がこんな可愛い子とか、幸先よくない？  
とりあえず安心させようと、にこっと笑いかける。

そのまま反対側へ目を向けた瞬間、俺は小さく首を傾げた。

そこにいたのは、全身を黒銀の鱗で覆った巨大な竜だった。二十メートルくらいか。そいつは黙ったまま、じつとこちらを見据えている。

「……………」

「……………」

「……えーっと？」

あまりの沈黙に、間の抜けた声が漏れた。

竜はズシン、と一步踏み出す。それだけで地面が揺れる。

竜か。この子も俺と同じ墮竜なのかな。いや、でも魔力量が小さすぎるし、真祖竜ではないのか？

黒銀の鱗。裂けた口元から漏れる白い息。獣じみた光を宿した眼。

六本足の異形で、尾は鞭のようにしなる。どう見ても、今にも飛びかかってきそうな構えだった。

……つて、あれ？

めちやくちや睨まれている。鼻息も荒い。

完全に狩る側の目だ。え、俺を狩ろうとしてる感じ？

「あの……こんにちは？」

一応あいさつしてみる。もちろん返事はない。

代わりに魔竜は首をもたげ、さらに一步踏み込んできた。鱗が擦れ合って、金属みたいな音を鳴らす。

うん……だめだな。話す気ゼロだ、これ

いやほんと、なんでこんなに怒ってるんだ、この子。

……子ではないか。でも竜として見ると、妙に後輩感があるんだよな。なんでだろう。

俺がそんなことを考えている間にも、魔竜の喉から低い唸り声が漏れ始める。

「ええ……何そんな怒ってるの？ ちよつと地面に突き刺さっただけじゃない。不慮の事故だよ、これは」

困惑しかない。こっちはただ空から降ってきただけだし、この子の縄張りだつて知らなかったのだ。驚かせたならゴメンね、くらいの認識である。

……そこで、ふと思に至る。

あれ。この子、俺のことただの人間だと思ってる？

今の俺は人間の姿で、真祖竜の力も魔力の波動もほぼ完全に抑えている。  
見た目だけなら、どこにでもいそうな少年にしか見えないはずだ。

つまりこの魔竜から見れば、俺はひょろい人間の小僧でしかない。

……あ、これ、めちゃくちゃ誤解されてるやつだ。  
そう思った瞬間、魔竜の尾がビュオン！ と一閃し、地面を薙いだ。土が爆ぜ、周囲の草が根こそぎ吹き飛び、数メートル先の木々がばたと倒れていく。完全に戦闘モードだ。  
おお、やる気だねえ。

反射的に一步後ずさる。たぶん当たってもそこまで痛くはないと思う。  
けれど今の俺は人間サイズだ。このサイズ差を前にすると、頭で平気だと分かっているけど、心がついていかない。

ちら、と背後を見る。女の子はまだ尻もちをついたまま、こちらを見上げていた。その目に、ほんの一瞬、涙の光が見えた気がした。

……あらら、かわいそうに。怖い思いしちゃったのね。とりあえず、これ以上怯えさせたくないなあ。

俺は背筋を伸ばした。そして目の前の魔竜へ向かって、にっこりと微笑んでみせる。

「よしよし、驚かせてごめん。キミの縄張りだったんだよね？ ごめんごめん、すぐ出ていくから、ね？」

向こうからすれば、俺はいきなり空から落ちてきた人間でしかない。そう思うと、相手の竜を一方的に悪者扱いするのも気が引けた。野生動物には優しくしたい。

言葉は通じなくても、せめて敵意がないことだけでも伝われば——そう思った。

だが、魔竜の反応は鋭く、激しかった。

ゆっくりと口が開く。空気が震え、その目は完全に捕食者の眼になっていた。喉の奥が低く唸り、怒気を帯びた白い息が森を揺らす。まるで嵐の前触れだった。

あつ……これ、ブレスくる感じ？

首の引き具合。口元に集まる光。膨らんでいく空気。見れば分かる。こいつ、やる気だ。

うーん……どうしたもんかなー……

少し冷静に状況を見ていた、そのときだった。

「あぶないっ——！」

——ザッ！

何かが、俺の視界を遮った。

「……え？」

金の髪が、風に揺れていた。

さっきの女の子——あの子が、俺の前に立っていた。

剣を握る手は震え、膝も少し曲がっている。それでも彼女は、両手を広げて、確かに俺を庇うように立っていた。

「ちよ、ちよっと……？」